

名 誉 博 士 候 補 者 調 書

フリガナ ハジ・アブドル・ラザク・ビン・アブドル・ハミド
氏 名 Haji Abdul Razak Bin Abdul Hamid

業 績

ハジ・アブドル・ラザク・ビン・アブドル・ハミド氏は、1944年に当時の国費留学生制度であった南方特別留学生として来日し、1945年4月に広島大学の前身校である広島文理科大学に入学した。しかしながら、勉学半ばして同年8月6日に広島市内で被爆。奇跡的に難を逃れ、被爆に苦しむ広島市民の救助に尽力した。当時、広島文理科大学で一緒に学んでいた南方特別留学生のニック・ユソフ氏とサイド・オマール氏は被爆死し、今も広島と京都で眠っている。後年、自らの被爆体験や広島での経験をマレーシア国内で伝え、平和活動の推進に大きく貢献した。

帰国後、同人はスルタン・イドリス師範学校に入学。1957年にマレーシアは英国からの独立を果たした。独立直後の同国では、国語となったマレー語教師が不足し、同人はマレー語教師としてマレー語を教えた。1976年には、国営テレビでジャウイ（マレー語を表記するアラビア文字）の番組に出演し、一躍有名になるとともに、マレー語の全国的な普及に大きく貢献した。

1978年にマラ工科大学のインスティテュートのマレー語及び日本語の講師となる。1982年、マハティール首相が提唱したルック・イースト政策で、産業技術研修生の日本語予備教育が同大学で開始されると、そのプログラムの責任者に抜擢される。この時期から日本とマレーシアとの交流が活発化し、1983年の中曽根康弘元首相のマレーシア訪問の際に、同人の功績が認められ、勲四等瑞宝章の叙勲を受ける。

その後、1998年に同大学を退職し現在に至っているが、これまでの間、日本語教育者としてマレーシア国内の日本語の普及に努めるとともに、本学にも何度となく表敬訪問に訪れるなど両国の交流促進に多大な貢献をした。

以上のように、同人は日本とマレーシアの友好関係の強化に努めるとともにマレーシアでの日本語教育の発展にも多大に貢献した。また、被爆直後も広島市民の救助に尽力するとともに、帰国後も自らの被爆体験や本学での経験をマレーシア国内で伝え、本学の基本理念の一つである「平和を希求する精神」の実現に大きく貢献しており、本学の教育・研究並びに国際交流の推進に寄与した功績は極めて顕著であり、本学の名誉博士号の称号を授与すべき候補者として推薦するものである。